福岡教育大学大学院教職実践専攻年報　第13号　47-54（2023）

［研究論文］

中学生の学習意欲を促進させるガイダンス授業と個別支援の試行的実践

A Trial Practice of Guidance Lessons and Individual Support to Promote Learning Motivation among Junior High School Students

坂　本　昌　弥
Masaya SAKAMOTO

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻
教育実践力開発コース
教職教育高度実践力プログラム

西　山　久　子
Hisako NISHIYAMA

福岡教育大学大学院教育学研究科
教職実践ユニット

（2023 年 1 月 31 日受理）

本研究では，生徒の学習意欲を引き出す手立てを見出すことを目的とし，公立 A 中学校３年生 34 名を対象に定期テストに向けたガイダンス授業を全体に行い，効果的な定着に向け，生徒支援として個別にコメントを送った。ガイダンス授業とコメントが学習意欲の向上に効果があったか，学習方略の使用尺度を用いて，多肢選択式の質問紙法と学習プリントの自由記述による実態把握を行い，生徒を成績上位層･下位層に分けて，分析･検討を行った。その結果，高群（上位層），低群（下位層）それぞれで，学習方略の使用度の変容が認められた。よって，個別支援を伴う学級全体へのガイダンス授業は，有効な学習支援の１つになることが示唆された。

キーワード：学習方略，ガイダンス授業，学習意欲，個別コメント，中学生

Ⅰ　問題と目的

子どもの学びへの動機づけの重要性が指摘され（清水・橘川，2009），学齢期の子どもの学びへの動機づけが問われている。勉強が好きか？と問われて，「好き」と回答した小学生が 62.0％であるのに対し，中学生では 37.6％に低下する。また，学年別に調査した結果では，学年が上がるにつれ，「好き」と回答した子どもの割合が減少している（ベネッセ教育研究所，2014）。こうした状況から，平成 29 年告示の学習指導要領（文部科学省,2017a）では，育成すべき資質･能力として，認知能力である「知識及び技能」，「思考力･判断力･表現力等」の２つとともに，非認知能力である「学びに向かう力･人間性」が重要であることが示された。

学ぶ意欲，すなわち学習意欲について学習用語辞典（2009）は，「学びたいとか，学ばなければならないというような気持ちのこと」と定義している。また，鹿毛（2013）は，「学習に関連する目標志向的な行動を引き起こす活性化された心理状態であり，動機づけの個人内要因と個人外要因に規定されつつ，その場，その時に顕れる，学習へと向かう積極的な心理現象」としている。これらのことから，学習意欲とは，学習に向かう気持ちのことであり，その動機づけは個人内要因と個人外要因があることが分かる。

平成 29 年告示の学習指導要領特別活動編(文部科学省,2017b)では，ガイダンスとは「生徒のよりよい適応や成長，人間関係の形成，進路等の選択等に関わる，主に集団の場面で行われる案内や説明」と定義されている。また，ガイダンスの機能を「案内や説明等を基に，生徒一人一人の可能性を最大限に発揮できるような働きかけ，すなわち，ガイダンスの目的を達成するための指導を意味するもの」と定義している。そして，ガイダンスの具体として「生徒の学級・学校生活への適応やよりよい人間関係の形成，学習活動や進路等における主体的な取組や選択及び自己の生き方などに関して，教師が生徒や学級の実態に応じて，計画的，組織的に行う情報提供や案内，説明及びそれらに基づいて行われる学習や活動などを通して，課題

等の解決・解消を図ることができるようになること」と示している。よって，ガイダンスの趣旨を踏まえた指導を行うことが求められている。

学習意欲と関連の深いものに,学習方略がある。岡田（2007）は，学習方略に着目し，高校生を対象に英単語学習において，学習方略の教授により意欲が伸びることを示した。これらのことから，教師は，教科学習における指導のみならず，その学習活動で，生徒が自らの成長を促進させられるよう，生徒を指導・支援することが求められる。

以上より，本研究では，生徒の学習等へのモチベーションを引き出すことを目途として，学習意欲の個人内要因に着目し，ガイダンスの機能を授業に取り入れ，生徒の学習意欲の向上をめざす。生徒が学習方略を使用できるようになったかを確かめることにより，学習意欲の向上を見取る。

Ⅱ　研究１

１．目的

研究２に向けて，学習意欲の向上を目指したガイダンス授業を試行し，その内容や評価について検討を行う。

２．調査対象

公立Ａ中学校３年 34 名

３．研究期間

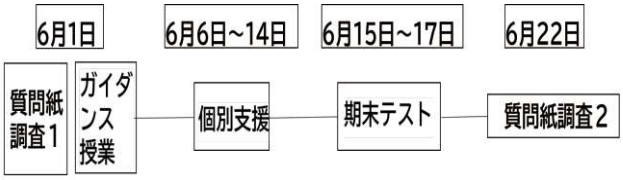


図１　研究１デザイン図

全体の研究デザインを図１のように計画し，2022 年６月に実践を行う。

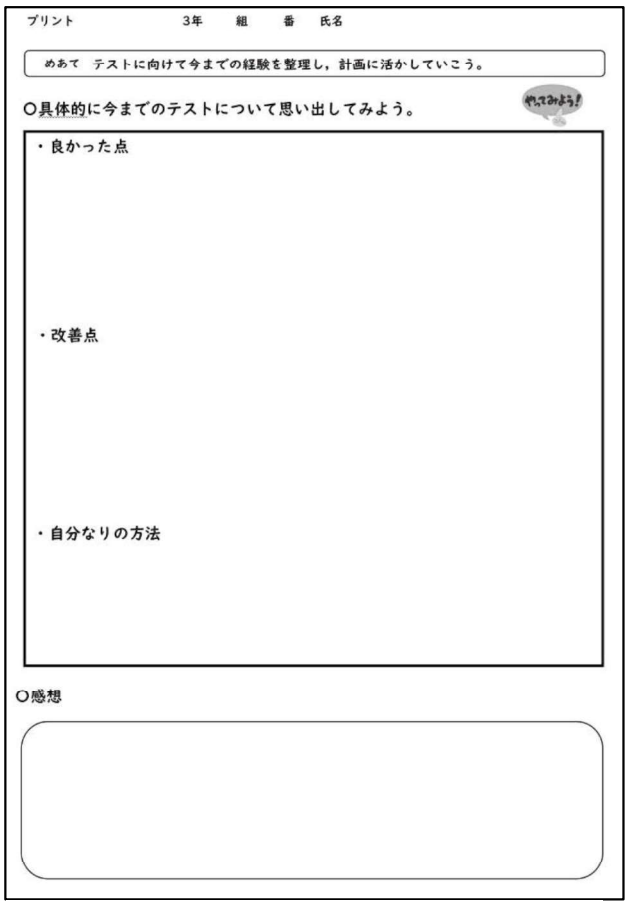
４．評価尺度

ガイダンス授業実施前と期末テスト終了後（授業実施から３週間後),ガイダンス授業と個別支援として行うコメントが学習意欲の向上に効果があったか，学習方略の使用尺度(佐藤・新井，1998)を用いて，多肢選択式（５件法）の質問紙法による実態把握を行い，分析･検討を行う。ガイダンス授業の学習プリントに生徒が記入する自由記述は,記載されている目的で集約化することができるKJ 法（川喜田，2017）を用いて分析を行う。

５．実践の内容

（１）ガイダンス授業

１学期末テストを対象に学習計画の立て方についてガイダンス授業を行った。生徒が，成功や失敗といったそれぞれ個別に感じているこれまでの定期考査（1.2 年次）の経験を今回や今後の定期考査の学習計画に活かすことができたら決して無駄にはならないことを確認した。その後，生徒がこ


プリント　　3年　組　番　氏名

めあて　テストに向けて今までの経験を整理し，計画に活かしていこう。

○具体的に今までのテストについて思い出してみよう。

やってみよう!

・良かった点

・改善点

・自分なりの方法

○感想

図２　ガイダンス授業学習プリント

表１　ガイダンス授業計画概要

日時	令和４年６月１日　第４校時　学級活動内 20 分
対象	Ａ市　Ｂ中学校　第３学年　34 名(欠席者４名)
教師の手立て	○質問紙を用いて各生徒の意欲傾向を調査する。 ○これまで（１.２年次）の経験を活かすことが１学期末テストの計画立てにおいて大切であることを確認する。 ○これまでの経験を具体的に以下の３点で整理する。 良かった点・改善点・自分なりの方法 ○友達とこれまでの経験を整理した内容を共有する。 ○計画立てにおいての助言をまとめた資料を配布する。

表２　ガイダンス授業実践前後の学習方略の使用尺度得点の平均値と対応のある *t* 検定結果（研究１）

	高群 n=16					低群 n=14				
	実践前	実践後	t値	自由度	有意確率	実践前	実践後	t値	自由度	有意確率
柔軟的方略(Max=40)	30.63	31.81	1.01	15	.329	25.86	27.93	1.48	13	.164
プランニング方略(Max=30)	21.88	22.94	1.07	15	.302	19.14	20.14	0.87	13	.402
作業方略(Max=30)	20.81	22.56	2.60	15	.020*	19.50	21.00	1.30	13	.217
友人リソース方略(Max=20)	11.44	12.19	1.03	15	.319	10.79	13.21	2.18	13	.048*
認知的方略(Max=35)	27.50	28.56	1.71	15	.108	22.79	22.93	0.11	13	.912

*p<.05 **p<.01

れまでの定期考査（1.2 年次）の経験を１学期末テストの学習計画に活かすために具体的（良かった点・改善点・自分なりの方法）に振り返り，整理を行った。その後，ペアを作り各個人が整理した内容を共有する時間を設けた。

この活動により，生徒は自分自身の学習内容を改めて振り返ることで客観的に自己の学習を捉えることができる。また，他の生徒の定期考査準備にも触れることにより，生徒の学習への取り組みの変化が期待できる。

（２）個に応じた支援

東京都教職員研修センター（2006）は学ぶ意欲を学習内容重視（学習すること自体(学ぶことや学習内容)に学ぶ意義や価値を感じる）と他者・条件重視（学習以外(他者・条件など)に学ぶ意義や価値を感じる）の二つに分類した。さらに，学習内容重視を３傾向（追求･向上･活用），他者・条件重視も３傾向（勝敗･関係･褒賞）に分類している。本研究では，生徒の自発的な学習意欲を高めることを目的としているため,学習内容重視に着目した。また,各生徒の学習意欲の傾向（追求･向上･活用）を調査し，それらに沿った学習法や学習計画についてのコメントを各生徒に対して期末テスト初日の９日前から前日までの６日間送った。

この活動により，第一著者は生徒個々の学習意欲傾向に応じたコメントを送ることができる。また，期末テストに向けた学習計画や取り組みについての悩みや疑問に対して生徒個々に対応することができる。よって，期末テストまでの取り組みをガイダンス授業のみで工夫・改善できる生徒もすぐに自分一人では工夫・改善することができない生徒も，どの生徒にも個別のニーズに合わせた支援を行うことができる。

（３）支援の評価

今回の第一著者の支援の評価として，質問紙調査（学習方略の使用尺度(佐藤・新井，1998)）をガイダンス授業実施前とガイダンス授業実施３週間後（期末テスト終了後）に行い，対応のある *t* 検定（小宮・布井，2022）を用いて学習方略の伝達ができたかを５つの観点（柔軟的方略・プランニング方略・作業方略・友人リソース方略・認知的方略）で見取った。また，第一著者からのコメントを計画や学習に取り入れたかをアンケートで見取った。さらに自由記述は,KJ 法(川喜田,2017)を用いて分析を行った。

（４）結果と考察

質問紙調査から，事前・事後の時期の比較を検討した。偏差値50以上高群では，勉強で大切なところは,くり返し声に出して覚えるなどの「作業方略」について，ガイダンス授業実施後（M(平均値)=22.56，SD(標準偏差)=4.68）がガイダンス授業実施前（M=20.81，SD=4.17）よりも有意に高かった（$t(15)=2.60$，$P=.020$）。偏差値50未満の低群では，勉強でわからないところがあったら，友達に勉強のやり方を聞くなどの「友人リソース方略」について，ガイダンス授業実施後（M=13.21，SD=2.36）がガイダンス授業実施前（M=10.79，SD=3.51）よりも有意に高かった（$t(13)=2.18$，$P=.048$）。

なお個人情報に配慮し，偏差値に基づく高群・低群の分類は，学級担任のご協力をいただき，個人名を外した情報を口頭で共有していただいた。

ガイダンス授業の感想（自由記述）を KJ 法（川喜田,2017）により分析した結果，28 名が学習法（プランニング９名,改善点５名,友達の学習法４名,テスト準備３名）について具体的に記述しており，２名がガイダンス授業について記述していた。

また，第一著者の個別コメントを計画や学習に取り入れたと答えた生徒は 18 人(60%)であった。

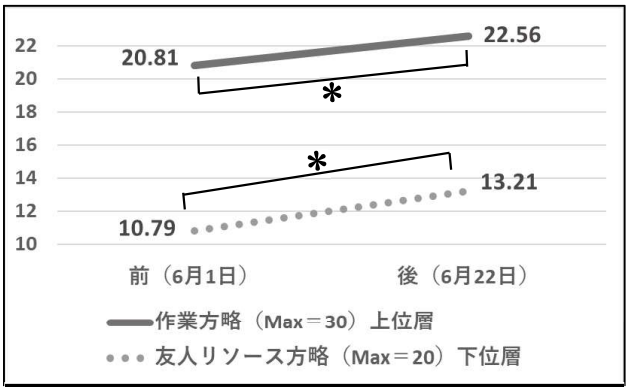


図３　授業前後の学習方略の使用尺度 *t* 検定結果

以上より，学習意欲の向上を目指して実施したガイダンス授業については，全生徒がテストに向けた取り組みを前向きに行おうとしていることや28名が学習法について述べていることから，生徒の学習意欲の向上についての具体的な意識づけができたと考える。また，高群（成績上位層）には作業方略，低群（下位層）には友人リソース方略で，使用度の変容が認められた。よって，学習の定着状況により，異なる側面で生徒の学習意欲の向上との間に関連性があることが示唆された。

研究１から４ヵ月後の学級担任への聴き取り調査で学習方略の定着に課題が見られたことから，研究２では，フォローアップとして，テスト後の授業で取り組みの整理のために内容の省察を行う。

Ⅲ　研究２

１．目的

第一著者が，生徒の学習意欲の向上を目指したガイダンス授業と全体指導を効果的なものとするため，個別的支援を行う。これらの支援が，生徒自身が学びの課題を見出し，自分に合った方法に近づくよう探索的に学習方略を検討し，取り組むことを促進することができるか検証する。

２．調査対象

公立Ａ中学校３年34名

３．研究期間

全体の研究デザインを図４のように計画し，2022年10月から11月にかけて実践を行う。

図４　研究２デザイン図

４．評価尺度

ガイダンス授業１実施前とガイダンス授業２実施後（期末テスト終了後），ガイダンス授業と個別支援として行うコメントが学習意欲の向上に効果があったか，学習方略の使用尺度（佐藤・新井，1998）を用いて，多肢選択式（５件法）の質問紙を用いて実態把握を行い，分析･検討を行う。ガイダンス授業の学習プリントに生徒が記入する自由記述は，KH Coder（樋口，2020）を使用し，キーワードで集約されるテキストマイニングにより分析することで，生徒の取り組みを質的に捉えることを試みる。

５．実践の内容

（１）ガイダンス授業

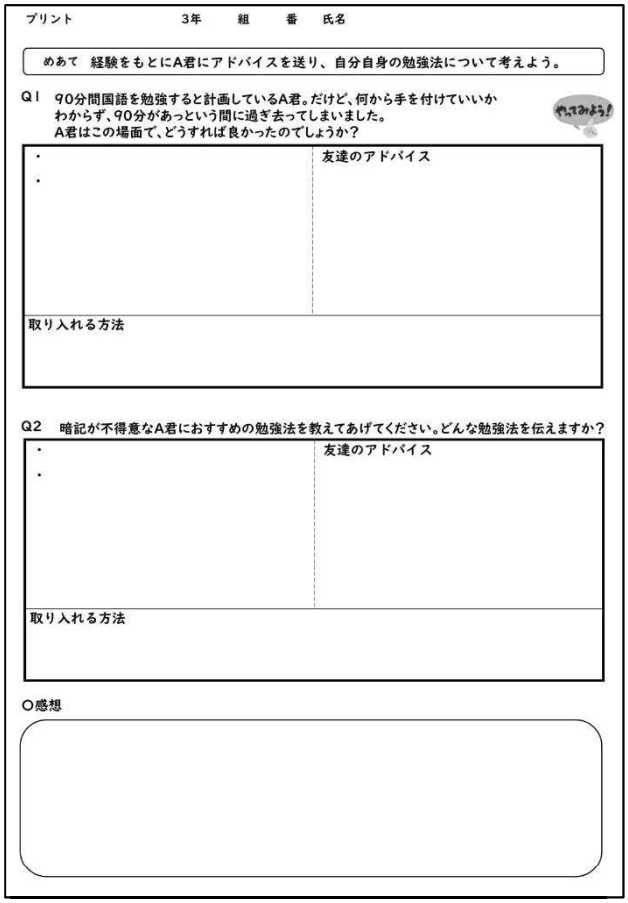
①ガイダンス授業１

２学期末テストを対象に学習方略の獲得を目指したガイダンス授業１を行った。生徒はＡ君（架空の人物：中学３年生で期末テストまで残り２週間という設定）に対して，これまでの経験からテスト勉強計画の立て方や学習方法についてアドバイスを送るという内容で活動を行った。その後，生徒はペアや学級全体でＡ君に対するアドバイスを共有した。さらに，生徒個々で実際に２学期末テストの勉強計画や学習に取り入れる方法を記入し，自分の考えを整理する時間を設けた。

この活動により，生徒は自分自身の学習内容を改めて振り返ることで客観的に自己の学習を捉えることができる。また，Ａ君にアドバイスすることで生徒自身の中にある自分に合った方法をより明確化することができる。さらに，研究１と同様に他の生徒の定期考査準備にも触れることにより，生徒の学習への取り組みの変化が期待できる。

②ガイダンス授業２

フォローアップとして，生徒が２学期末テストへの取り組みを整理する時間を設けた。教科ごと


プリント　　3年　　組　　番　　氏名

めあて　経験をもとにA君にアドバイスを送り、自分自身の勉強法について考えよう。

Q1　90分間国語を勉強すると計画しているA君。だけど、何から手を付けていいかわからず、90分があっという間に過ぎ去ってしまいました。A君はこの場面で、どうすれば良かったのでしょうか？

やってみよう!

・
・

友達のアドバイス

取り入れる方法

Q2　暗記が不得意なA君におすすめの勉強法を教えてあげてください。どんな勉強法を伝えますか？

・
・

友達のアドバイス

取り入れる方法

○感想

図５　ガイダンス授業１学習プリント

表２　ガイダンス授業１計画概要

日時	令和４年 10 月 26 日　第６校時　学級活動内 50 分
対象	Ａ市　Ｂ中学校　第３学年　34 名(欠席者５名)
教師の手立て	○ジュベールの言葉を用いて，人に教えることの大切さを確認する。 ○これまでの経験からＡ君にアドバイスを送る。 ・テスト勉強計画について ・おすすめの学習方法について ・アドバイスをペア，全体で共有する ○今回のテスト勉強や学習計画で取り入れる方法をプリントに記入する。

に試験範囲を記した学習プリントを配布し，生徒がそれぞれの教科でどのような対策を行ったかをプリントを用いて振り返ることができるようにした。その後，実際に取り組んでみて「良かった」ものと，取り組み方を知りたい「上手くいかなかった」ものに色を変えて印をつけるような時間を取った。最後に，生徒が整理したものをペアで共有する時間を設けた。

この活動により，生徒は自分自身の定期考査への取り組みを改めて振り返ることで,「やりっぱなし」にすることなく，テストの記憶が新しい段階で検討し，次回の定期考査で今回の反省や成果を活かすことができる。また，友達同士で意見を共有することで新たな視点を獲得することができ，取り組みのレベルアップをすることが期待できる。

期末テスト振り返りプリント　3年　組　番　氏名

めあて　期末テストへの取り組みを整理し、今後の試験勉強に活かそう。

今回のテスト勉強で実際に行った勉強法や計画（時間の使い方やすき間時間など）について整理しよう。
※実際に行ったものはシャーペンで、追加でこの勉強をすればよかったなと思ったものは色をつけて記入する。

教科	試験範囲	行った勉強法や計画（時間の使い方やすき間時間など）
英語	関係代名詞 教科書P48～69 ジョイフルワークP38～57 語順トレーニングP15～18	
理科	イオン 酸アルカリ 教科書P174～223 理科ノートP90～113	
社会	人権と共生社会 国の政治の仕組み 公民教科書P50～109 公民ワークP16～39	
技術	スプレットシート マイクロビットのプログラム 情報モラル	
家庭科	○消費者生活分野全体 プリント①～⑥ 教科書P226～245	
国語	○フロン規制の物語 (P88～98) ○おくのほそ道 (P120～130) ○論語(P132～135) ○漢字20～27 (P314洞～P317零) ○実力問題	
数学	相似な図形 関数$y=ax^2$ ○教科書P90～P131 ○ワークP76～P101 ○小問集合	

○感想（良くできたと思う点や改善点、次回のテストに向けての改善案を書きましょう。）

図６　ガイダンス授業２学習プリント

表３　ガイダンス授業２計画概要

日時	令和４年 11 月 16 日　第６校時　学級活動内 30 分
対象	Ａ市　Ｂ中学校　第３学年　34 名(欠席者８名)
教師の手立て	○期末テストへの取り組みを学習プリントを用いて整理する。 ○整理したことをペアで共有する。 ・取り組んでみてこの方法良かったなと思ったこと ・うまくいなかなったことや，友達に聞きたいこと ○次回のテストへ向けた改善点などをプリントに記入する。

（２）個に応じた支援

学習法や学習計画についてのコメントを生徒に対して期末テスト開始３日前からテスト初日までの３日間送った。研究１では，生徒に対しコメントを送るために大変な時間を費やしたため，今回は効率を考慮し同じ内容のコメントを生徒に送った（日ごとに内容は変わる）。

この活動により，期末テストに向けた学習計画や取り組みについての悩みや疑問を持っている生徒を重点的に対応することができる。よって，期末テストまでの取り組みをガイダンス授業のみで工夫･改善できる生徒もすぐに自分一人では工夫･改善することができない生徒も，どの生徒にも個別のニーズに合わせた支援を行うことができる。

（３）支援の評価

今回の第一著者の支援の評価として，質問紙調査（学習方略の使用尺度(佐藤・新井，1998)）をガイダンス授業１実施前とガイダンス授業２実施後（期末テスト終了後）に行い，対応のある t 検定（小宮・布井，2022）を用いて学習方略の伝達ができたかを５つの観点（柔軟的方略・プランニング方略・作業方略・友人リソース方略・認知的方略）で見取った。また自由記述は，KH Coder(樋口，2020)を使用より分析を行った。

（４）結果と考察

質問紙調査から，事前・事後の時期の比較を検討した。偏差値50以上の高群では，内容を相互に

表５　ガイダンス授業実践前後の学習方略の使用尺度得点の平均値と対応のある *t* 検定結果（研究２）

	高群 n=15					低群 n=10				
	実践前	実践後	t値	自由度	有意確率	実践前	実践後	t値	自由度	有意確率
柔軟的方略(Max＝40)	32.33	33.80	1.88	14	.081	29.60	31.70	2.33	9	.045*
プランニング方略(Max＝30)	22.87	22.33	0.44	14	.667	19.80	21.50	2.01	9	.075
作業方略(Max＝30)	24.53	25.27	0.64	14	.530	20.50	21.30	0.77	9	.462
友人リソース方略(Max＝20)	12.20	11.80	0.51	14	.616	11.00	12.10	1.38	9	.200
認知的方略(Max＝35)	28.07	29.73	2.16	14	.049*	23.40	24.70	1.23	9	.249

*p<.05 **p<.01

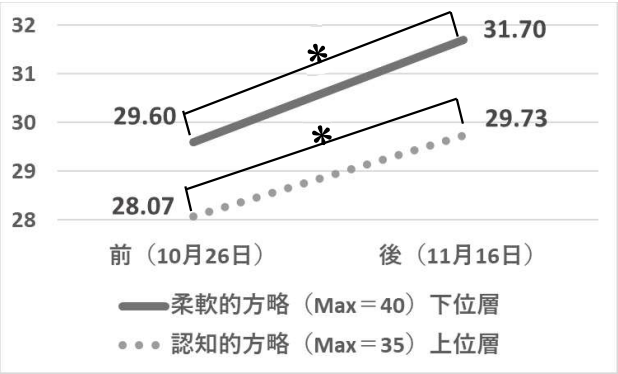


図７　授業前後の学習方略の使用尺度 *t* 検定結果

関連付けたりすることで学習内容の理解を深める「認知的方略」について，ガイダンス授業２実施後（M(平均値)=29.73，SD(標準偏差)=3.45）がガイダンス授業１実施前（M=28.07，SD=3.77）と比べ有意な上昇がみられた（$t(14)=2.16$，$P=.049$）。偏差値50未満の低群では，学習の進め方を自分の状態に合わせて柔軟に変更する「柔軟的方略」について，ガイダンス授業２実施後（M=31.70，SD=4.37）がガイダンス授業１実施前（M=29.60，SD=6.04）と比べ有意な上昇がみられた（$t(9)=2.33$，$P=.045$）。

なお偏差値に基づく高群・低群の分類は，個人情報に配慮し，学級担任のご協力を得て，個人名を外して口頭で共有していただいた。

授業の感想(自由記述)をKH Coder(樋口，2020)を用いて分析した結果，ガイダンス授業１の感想は，「頑張る」や「取り入れる」などの言葉が使われていた。また，ガイダンス授業２の感想は，「受験」や「取り組む」などの言葉が使われていた。

以上より，学習意欲の向上を目指して実施したガイダンス授業１は，テストへの取り組みを前向きに行おうとする姿勢が伺えることから，生徒の学習意欲の向上についての具体的な意識づけができたと考える。また，フォローアップを目的として実施したガイダンス授業２は，生徒が今後を見据えていることが伺えることから，学習方略の定着の具体的な意識づけができたと考える。さらに，成績上位層には認知的方略，下位層には柔軟的方略で，それぞれ使用頻度の向上が認められた。よって，学習の定着状況により，異なる側面で生徒の学習意欲の向上との間に関連性があることが示唆され，指導面で有益な実践的知見が見出された。

Ⅳ　総合考察

本研究では，生徒の学習方略の多様化と向上を目指し，一斉でのガイダンス授業と個別での学習支援を行った。その結果，研究１では成績上位層で作業方略，成績下位層で友人リソース方略に有意な上昇が見られた。また，研究２では成績上位層で認知的方略，成績下位層で柔軟的方略に有意な上昇が見られた。これらより，本研究のガイダンス授業と生徒へのコメントは，学習方略の変容に効果があることが示唆された。関・西山(2018)は，中学生の不登校が無気力感によるものであることの背景に，学習への不安が影響しているという実態調査の結果から，中学校入学直前の児童に自己調整学習サイクルを用いたガイダンス授業を実践し，無気力感の低減に一定の成果を得ている。このことは，個別最適化された支援を全ての子どもの学びに即して行う必要があることを示しており，ガイダンスカリキュラムに基づく計画的支援によって，教師が１対１で支援をすることのみに依存せず，ガイダンス授業の中で多様な学び方を示し，それを各児童が試行錯誤することで，個別に適切な学び方を体得することの効果を示している。本研究においても，早期から子ども自身が多様な学び方に接する機会を持つ必要があることを裏付ける結果となった。

一方，プランニング方略では，有意な上昇を確認することができなかった。しかし，一定の水準での方略使用がみとめられている。これは，対象学年が中学３年であることが関係している可能性がある。中学３年生は中学校の最終学年であり，今まで何度も定期考査を経験している。よって，定期考査のプランニングに関して一定の経験値がある。それゆえに，目新しいものが第一著者から生徒へ提供できなかった可能性が考えられる。

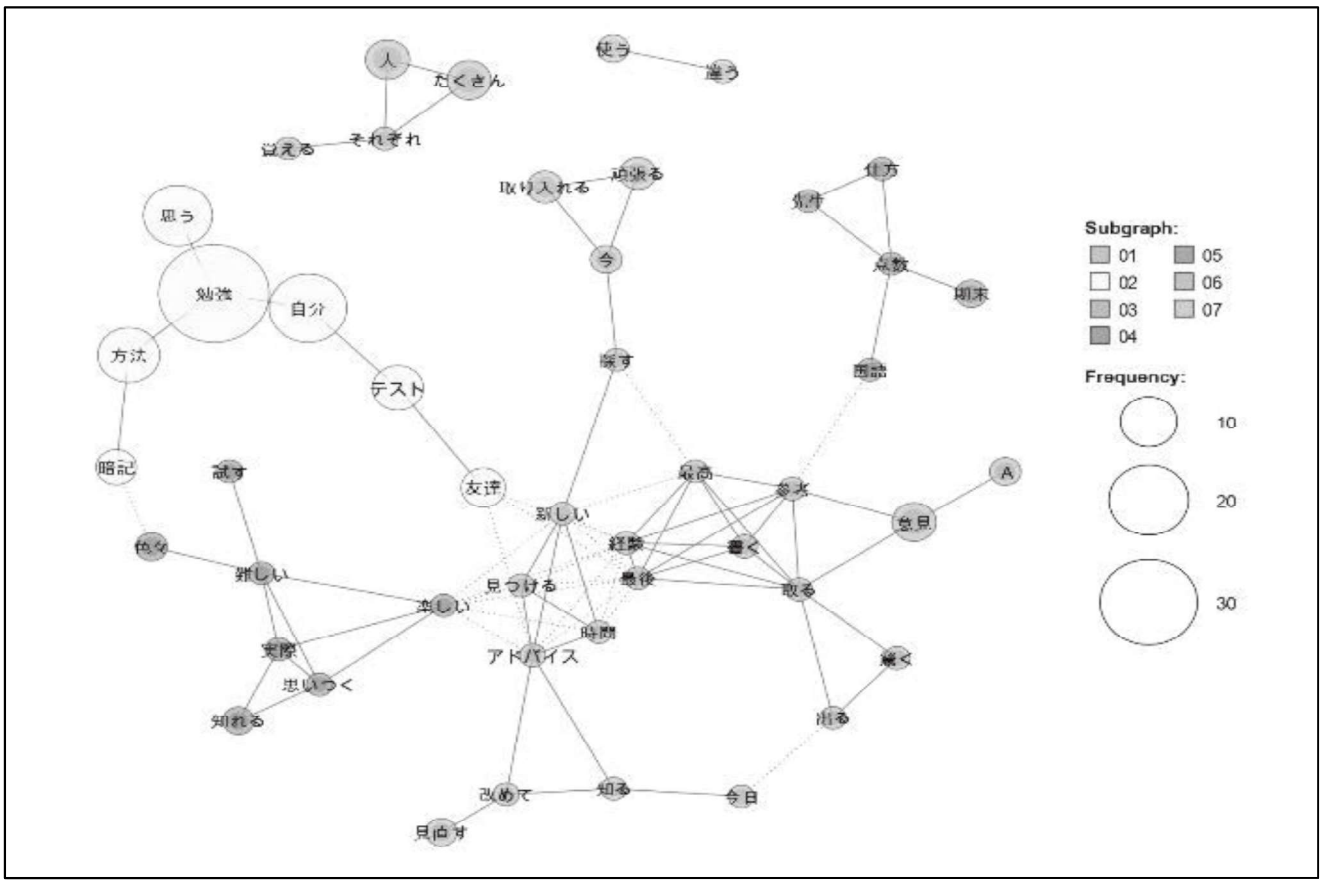


図８　ガイダンス授業１の自由記述の共起ネットワーク(n=29)

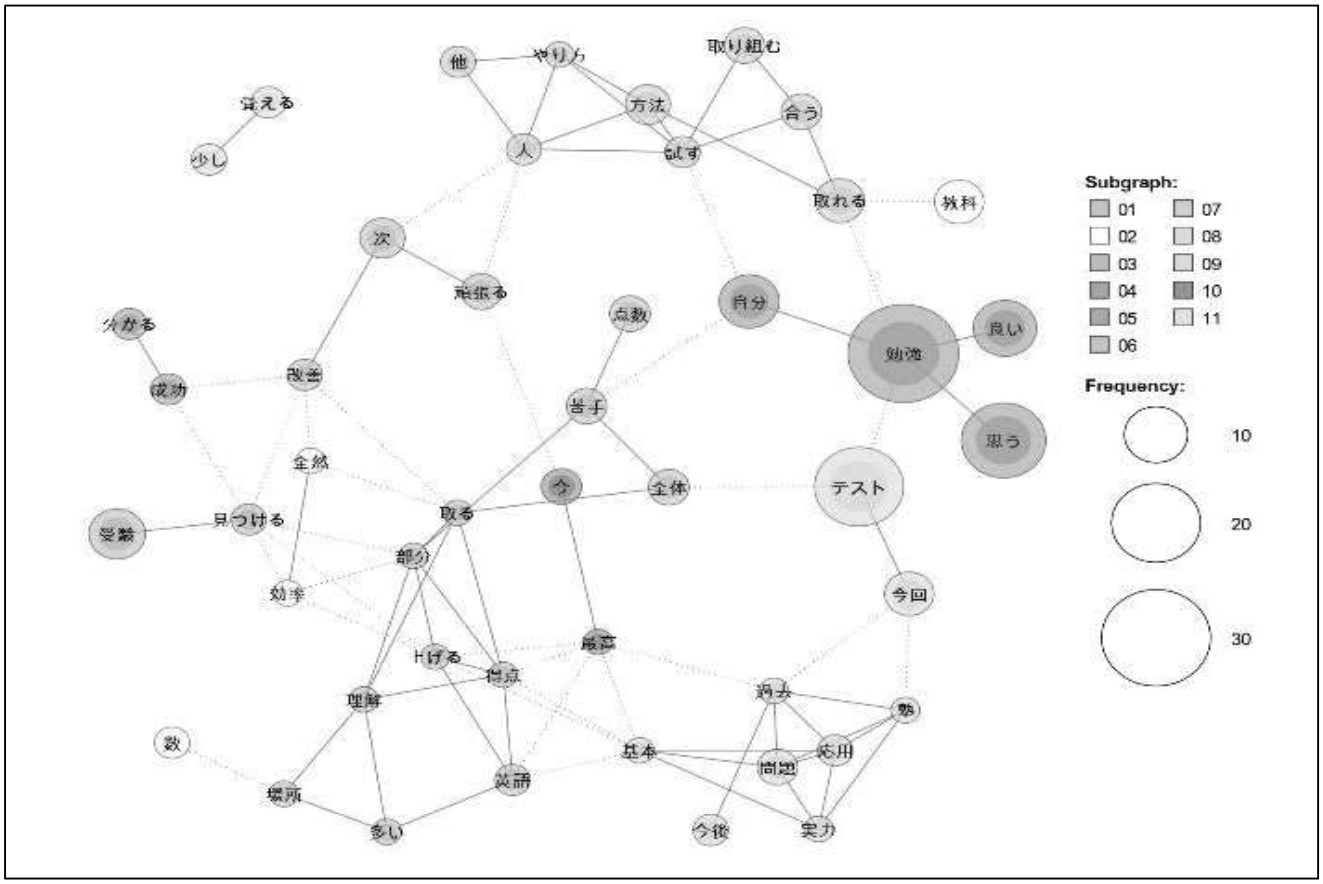


図９　ガイダンス授業２の自由記述の共起ネットワーク(n=26)

ガイダンス授業実施前後で比較すると，友人リソースを除く４つの方略（柔軟的・プランニング・作業・認知的）すべてにおいて成績上位層の方が成績下位層と比べ，使用度の平均値が大きい。さらに，成績の程度により，有意な上昇が見られた方略が異なることから，成績の高群・低群では，より効果的な学習方略が異なることが示唆された。

続いて，本研究の課題を述べる。まず，今回用いた学習方略の尺度が，25 年前に開発されたものであり，現在の生徒の学習方略を把握する尺度として有効であるかについて，尺度の信頼性や妥当性を確認する必要があると考える。また，実践学級が１学級のみであったため，学級担任や授業実施者（第一筆者）との関係性を反映した可能性がある。また，1 学級のみにおける実践であったため，ガイダンス授業の進め方や使用したツールなどの面から効果を比較的に捉えることが困難であった。そうしたことをふまえ，今後は，他学年や他学級でも実践し，中学校全学年での効果的な個別支援とガイダンス授業の在り方を検証する必要がある。

引用・参考文献

ベネッセ教育総合研究所　2014　小中学生の学びに関する実態調査　速報版　6-7

樋口耕一　2020　社会調査のための計量テキスト分析　－内容分析の継承と発展を目指して－　第２版　ナカニシヤ出版

鹿毛雅治　2013　学習意欲の理論－動機づけの教育心理学－　金子書房

川喜田二郎　2017　発想法　改版－創造性開発のために－　中央公論新社

小宮あすか・布井雅人　2022　Excel で今すぐはじめる心理統計－簡単ツール HAD で基本を身につける－　講談社

文部科学省　2017a　中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　総則編

文部科学省　2017b　中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　特別活動編

岡田いずみ　2007　学習方略の教授と学習意欲-高校生を対象にした英単語学習において-　教育心理学研究，55，287-299

佐藤純・新井邦二郎　1998　学習方略の使用と達成目標及び原因帰属との関係，筑波大学心理学研究，20，115-124

関　和浩・西山久子　2018　無気力型不登校の予防に向けた「学びの成長力」の促進－学習面のガイダンスカリキュラムの導入を通して－　福岡教育大学紀要　67-4，211-220

末吉美喜　2021　テキストマイニング入門－Excel と KH Coder でわかるデータ分析－　オーム社

清水美緒・橘川真彦　2009　小学校高学年における学習意欲に影響を及ぼす要因　宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要，32，117-124

辰野千壽　2009　学習指導用語事典　教育出版

東京都教職員研修センター　2006　学力向上を図るための指導に関する研究－学ぶ意欲を高め，よりよい学び方を身に付けさせるための授業改善資料の開発－　東京都教職員研修センター紀要/東京都教職員研修センター研修部教育開発課編，5，99-124